

わが心の自叙伝

菅原洋一

.....▷1

来年4月、ふるさと兵庫でのコンサートを楽しみにしているという菅原洋一さん＝東京都内

この夏で87歳を迎えた。実によく元気でここまでいられたなあというのが、正直な気持ちだ。今年にはコロナウイルス感染拡大で予定していたステージも延期や中止になり、「ああ、そろそろ歌手生活も終わりがかな…」なんて思っていた。

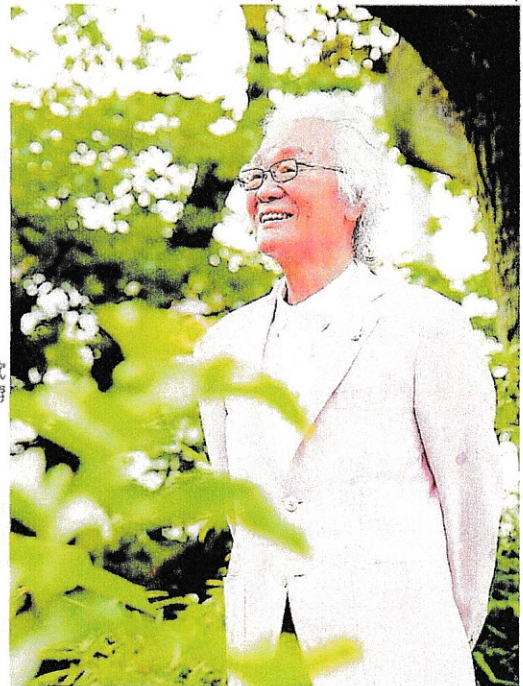
でも80歳のときに作ったアルバム「80才の私からあなたへ」が好評で、こうなったら声が続く限り挑戦しようと、翌年には「81才の私からあなたへ」、その翌年には「82才」、次は「83才」と毎年アルバムを作ってきた。デビュー60年の年の85歳のときは「歌い続けて60年」ふり返ればビューティフルメモリーで「第60回日本レコード大賞」の企画賞までいただき、「こうなったらもう少し頑張ろう」と今年も「87才の私からあなたへ」の発売を考えていた。今年には戦後75年の年なので、

◆ 87才の私からあなたへ

あの戦争のあとに、ラジオから流れた先輩歌手たちの歌を歌おうと決めていた。ところがコロナの影響で打ち合わせもできないければ、スタジオも休み。アルバム作りもままならない状態だった。

それでもなんとかしようと考えた。非常事態宣言の解除と同時にソーシャルディスタンスを守って、数日間アルバム曲を録音したのだ。そして9月に無事「87才」のアルバムを発売することができた。来年4月には神戸新聞松方ホールでのコンサートも決まった。

さて今日から「わが心の自叙伝」をつづる私は、今から87年前、1933（昭和8）年8月



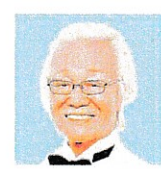
21日、加古川に生まれた。

たつの市出身の三木露風が詩を書いた童謡「赤とんぼ」の舞台、播州平野の真ん中にある豊かな自然あふれる商業都市。古くから物や人が集まる町だったようだ。関西と中国地方を結ぶ交通の要所だったからだろう。私の生家もまた「若松屋」という名の商店で、雑貨や野菜、乾物などを扱っていた。ところがどういうわけか、婚礼の商品から私の生家もまた「若松屋」という名の商店で、雑貨や野菜、乾物などを扱っていた。ところがどういうわけか、婚礼の商品から

棺桶まで置いてあったことを覚えていたので、まあ「よろずや」というところだったのだろう。何しろ父も母も毎日忙しく働いていたので、小さな私をかまっていられない。だからといって放ったらかしというわけでもなかったらしく、物心つくころから流れる流行歌を覚えて歌うようになっていった。

美ち奴さんの「あゝそれなのに」という歌、「へ空にゃ今

すがわら・よういち 1933（昭和8）年加古川市生まれ。加古川小、加古川中、加古川東高を経て国立音楽大学音楽科卒。58年デビュー。67年「知りたくないの」の大ヒットでNHK紅白歌合戦に初出場、以降22回連続出場。「今日でお別れ」で、70年日本レコード大賞を受賞。2019年、文化庁長官表彰を受ける。21年4月3日、神戸新聞松方ホールでコンサートを開く。



戦後の流行歌を歌い継ぐ

日もアドバルーン さぞかし会社で今頃は……。それを店先で歌ったら「よういっちゃん、うまいね」って。誰かにかまってもらうには、歌しかないんだ！ そのときの思いが、これまで歌い続けさせたのかもしれない。（すがわら・よういち＝歌手）